

「あまみエフエム ディ！ウェイヴ」放送原稿〈9月12日（金）放送分〉

テーマ「奄美の民話や昔話」

あまみエフエム ディ！ウェイヴをお聞きの皆様，おはようございます。鹿児島県立奄美図書館です。今日は，毎月第2金曜日にお届けする，「奄美の民話や昔話」シリーズの第6回，宇検村の昔話「鬼の姉」です。

昔，ある村に7人の子どもが^{やしな}いる貧しい夫婦の家がありました。そこでは長女が一生懸命に働いていて，弟たちを^{りこう}養っていました。ところが，姉はいつも夜になるとどこかへ出かけていきます。弟たちの中に利口な者がいて，^{ねえ}姉さんは毎晩どこに出ていくのだろうと思い，「姉さん，姉さん，毎晩どこにいくの。」と^{たず}尋ねてみました。すると姉は，「姉さんはおなかが痛くてね，^{けり}下痢をしているんだよ。」と答えるのでした。

そのころ，村ではニワトリが^{ぬす}盗まれた^{となり}，また犬がいなくなった^{ぬす}，豚がいなくなった^{ひと}，とあちこちで言っていました。また，^{うわさ}隣の村では，盗人も来ないのにいろいろな動物がいなくなる，という噂が広まっていました。

利口な弟は，姉さんが毎晩家を出ていくけど，今度は姉さんのあとを追ってみようと思ひ，ある晩，寝ないで目を覚ましていて，家を出ていく姉のあとをつけていきました。すると姉は，山の奥にさっさと飛ぶように走っていきました。また，鼻で大きな息をすると鼻から火が出てきて，暗い夜の小道を明るく照らしました。やがて姉は歩きに歩いて，山奥のさらに深い山に入って行き，イノシシたちが泥浴びをする池に入りました。姉がイノシシの^{おに}ように泥水^{うの}を体に浴びて池から上がるとき，ブルツと^{どう}胴ぶるいをする^{どう}と，姉の頭からは鬼のような角が出ていました。そして着物を着ると，また元の姉の姿に戻りました。そうして姉は家に帰っていきました。その様子をずっと見ていた弟は，姉が鬼になっているのだと思いました。

それからは，弟が毎晩気をつけて目を覚ましていると，姉が外から帰ってきたときに，^{けもの}獣の生臭い血の匂いがしてくるので，これはきっと姉が鬼になって獣を食べたのだなと思ひました。同じ頃，村では馬がいなくなった，豚がいなくなったと騒ぎが続いていました。

それで弟は，それは姉が食べてしまったのに間違いないと思ひて，父と母に，「姉さんの^{しょうたい}正体は鬼です。この村でいろいろな動物が1匹，また1匹と減っていくのは，鬼になった姉さんが食べているからです。」と言ひました。すると親たちは，「馬鹿なことを言うんじゃない，お前たちは姉の働きのおかげで暮らしていけるんだ。もし姉を鬼と言うのなら，どこへでも出ていけ。」と言ひました。弟は，「じゃあ，自分は家を出ていきます。」と言ひて家を出ていってしまいました。

弟は家を出てから一生懸命働いて妻をもらひ，やがてお金もたくさん貯めました。

弟が家を出てから十年ほどたったある日，弟は自分が^{ひとめ}生まれた村や鬼になった姉のことを思ひ出しました。そしてその後どうなったのか，一目見てみたいと思ひました。弟は妻に向かって，「これから自分はすごく速い馬に乗って，生まれた村まで行ってくるからね。それと，犬は^{えんがわ}縁側へつないでおくんだよ。もし犬が騒ぐときは，犬を放してあげるんだよ。」と言ひつけました。そして自分の村に向かって，馬を走らせました。やがて村が見える^{とうげ}峠まで来ると，弟は馬から下りて，タバコを一服しながら村の様子を見ていました。すると村には人の姿は見えず，物音はひとつも聞こえず，畑は荒れるだけ荒れていました。弟は，姉が鬼になって村の人間をみんな食べてしまったんだと思ひ

い、さらによく見てみると、自分が住んでいた家の近くから煙^{けむり}が出ていました。弟は、はるばるここまで来ていながら、姉に会わないで帰れるものかと思い、馬に乗って村に向かっていきました。そして自分が住んでいた家の前で馬を下り、こっそりと家の中をのぞいて見ると、姉は奥の方で何かをガツガツと食べていました。弟は、ここまで来て姉に声をかけないままでは帰れないと思い、縁側に馬をつなぐと、「姉さん。」と声^{こゑ}をかけました。姉は、「あら、お前は村に帰ってきたのかい。姉さんは、利口なお前を捜しに行こうと思っていたところだったんだよ。さあ、こっちへ入っておいで…。」と言いました。弟は家に入っていって、「姉さん、なぜこの村には一人も人間^{はや}がいないのかい。一人も見かけないんだが…。」と尋ねると、姉は、「この前、恐ろしい流行り風邪^{かぜ}があって、村のみんなが死んでしまったんだよ。私だけが体が強くてね、このように生き残っているんだよ…。」と言いました。弟が「そうだったのかい…。」と言うと姉は、「お前はここで、この桶^{おけ}を叩いているんだよ。今、姉さんがお前のためにごちそうを作ってやるからね。ちょっと川まで行ってくるからね。」と言って、川へ出かけて行きました。

弟が桶をタンタン叩いていると、天井から白いネズミが2匹落ちてきて、「やっぱりお前の言うとおりにすればよかった…。私たちはお前の父と母だよ。姉さんは鬼になって村の人たちをみんな食べてしまった。やがて^の私たち親や自分の兄弟もみんな食べてしまったんだ。だから、お前だけは逃げて生き延びるんだ。さあ、私たちがしっぽで桶を叩いているから、そのうちに早く逃げるんだ…。」^{ひとこと}と言いました。「そうしよう。」と弟は言う、馬に乗ろうとしましたが、その前に姉に一言^{ひとこと}だけさよならを言おうと、「姉さん、もう行くからね。」と言いました。すると姉は、「フイ」と言う、弟に飛びかかろうとしました。姉は、「私は牙^{きば}を研いでいたんだ…。お前を食べようと思ってね…。待て、待て〜。」と追いかけてきました。

そのうち姉は鬼の姿になって弟を追いかけてくると、たちまち追いついてしまいました。姉は弟が乗っている馬の尾にぶらさがると、馬を牙で噛み始めました。やがて山にさしかかったとき、馬が倒されたので、弟は近くにある木^きによじ登りました。姉は馬を食べ終わると、今度は弟を食べようと木の根元を掘りまくりました。木が倒れようとする、弟は別の木に飛び移って逃げました。しかし、飛び移る木もどんどんなくなり、弟はもう駄目^{だめ}だと思いました。するとそのとき、自分の家で飼っていた犬がどこ^{たか}からともなく走ってきて、鬼に飛びかかっていきました。鬼と犬は死にものぐるいの闘^{たたか}いをして、とうとう両方とも死んでしまいました。

弟は、「ああ、姉さんは鬼になってしまったんだな…。」と言う、死んだ犬をかついでいき、自分の命を助けてくれた犬^{そうしき}の葬^{そう}式^{しき}をあげ、石^{いし}の塔^{とう}を建てて供養^{くよう}してあげました。その後、弟は妻と幸せに暮らしたということです。

さて今回のお話はいかがでしたか。このお話のように親や兄弟姉妹が鬼になる、あるいは鬼が親や兄弟姉妹に成りすまして襲^{おそ}ってくるというお話は、日本全国に見受けられます。今回は鬼に食べられてしまった親と自分の家で飼っていた犬のお陰で主人公が助かるというものでした。主人公を助けてくれる存在にもいろいろな種類があり、昔話の面白さの一つです。

このように奄美図書館には、郷土に伝わる昔話を紹介した本がたくさんあります。ぜひ図書館にいらして、いろいろな本を手にとってほしいと思います。職員一同、皆様のご来館を心よりお待ちしております。以上、鹿児島県立奄美図書館でした。